

## 【研究課題】

# アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築

## Development and Construction of the General-Purpose Database for the Documentations in Asian Languages

研究代表者：三沢伸生

### 1. 研究の背景

21世紀以降、日本をはじめ海外の大学・公的研究機関はそれぞれに研究のために収集・保管してきた様々な史資料（文献・文書・写真・映像そのほか）を死蔵するのではなく、出版・インターネット上のホームページなどを用いて、汎用性の高いデータベースを構築して、国内外の大学・研究機関の間でネットワークを形成して共同でさらなる研究の進展を図りつつ、同時に研究成果として広く一般に公開することが通例となってきた。

本研究は1959年創設以来50年以上の歴史を有する本学のアジア文化研究所がこれまでに様々なプロジェクト研究のために収集・分析してきた様々なアジア諸言語（中国語、ハングル、タイ語・ミャンマー語などの東南アジア諸言語、アラビア語・ペルシア語・トルコ語などのイスラーム世界の諸言語）史資料公開を目的とした汎用性の高いデータベースの在り方を研究・設計・開発して、構築を行い、国内外の大学・研究機関との連携を高めて、本学・本研究所の研究を活性化・さらなる推進をはかる基盤を整備していくことが本研究プロジェクトの背景である。

### 2. 研究の目的

本研究プロジェクトは、長い歴史を有する本研究所が分析・収集してきた史資料を、汎用性の高い、すなわち国内外の大学・研究機関とさらなる共同研究の進展をはかりつつ、国際的なアジア研究を推進する基盤形成を第一の目的としている。

既存の多くの研究機関が実施しているように、データベースは単なる史資料の集積物ではなく、史資料の重要性を示すように工夫・設計し公開していかなくは意味がない。したがって長い歴史を有して多くの史資料を有している本研究所において、いかなる史資料を選択して、どのようなデータベースを構築すれば、より規模の大きい学術的な共同研究を喚起するものになるかを主眼に、研究員・客員研究員による共同研究で具体的なデータベースを設計し、必要に応じて中国人・韓国人・東南アジア諸国・イスラーム世界に関して国内外の研究者を共同研究者と迎えて、補完的な史資料の分析・整理を行って、データベースの設計を行い、これを出版、CD-ROM・DVDを用いた資料集の作成、本学ホームページ上に展開している本研究所のホームページにおいて公開していくことを目的とする。

より具体的には研究期間内に、アジア研究の基幹たる中国語（漢籍）・ハングル語、さらに国内の大学・研究機関で事例がほとんどないミャンマー語・トルコ語の4言語の史資料に関して、国内

外の学術的研究に寄与する汎用性の高いデータベースを構築・公開していくことを目的とする

日本における関連する研究においては、東京外国語大学が21世紀COEプログラム採択による「史資料ハブ地域文化研究拠点」があげられる。同プロジェクトは東京外国語大学および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が収集・保管してきた様々な史資料を公開してきた。本プロジェクトもこれと同じ目的を有するものであるが、当然ながら本学・本研究所と東京外国語大学の収集してきた史資料は重複するものではなく、お互いに連携し巨大な研究ネットワークの中で補完しあうものであって、国内および国際的な規模でさらなるアジア研究の進展に寄与するものとなりうる。そのなかで本研究プロジェクトの目指すアジア諸言語の史資料データベースはこうした学際的ネットワークの中に埋没することなく、むしろそのネットワークを構成する重要な拠点を構築するものと位置付けることができる。

### 3. 研究組織

研究員：植野弘子・斎藤里美・松本誠一・三沢伸生

客員研究員：石井隆憲・竹内洋介

研究協力者：飯塚勝重（客員研究員）・中村祐也（院生研究員）・小林栄輝（院生研究員）  
大室智人（客員研究員）

分担役割

- ① 中国語（漢籍）班：植野弘子・斎藤里美・竹内洋介・飯塚勝重・小林栄輝・大室智人
- ② ハンゲル班：松本誠一・中村祐也
- ③ ミャンマー語班：石井隆憲
- ④ トルコ語班：三沢伸生

### 4. 研究経過

初年度である平成28年度は、当初予定通りに、中心的事業として中国語（漢籍）においては『華陽国志』注釈プロジェクトで収集した膨大な量の中国民族学・民俗学史資料の整理を中心に進めて、とりわけ同プロジェクトの成果をデータベース化することを進めて、『華陽国志』の人名・地名・官職名のデータベース構築を進めた。本成果は、『『華陽国志』訳注稿』人名・地名・官職名索引』と題する118頁の索引を印刷物として刊行するほか、さらに年度末にむけてCD-ROMもしくはDVDを活用した史資料集として刊行する準備中であり、その経過につき以下に詳細を記す。また同時並行で研究所のホームページを活用して広く一般に公開する準備も進めている。加えて『全宋文』所掲宋代墓誌編年目録にも着手した。ハンゲル語史料に関しては、研究所所蔵のハンゲル語史料のデータベース化作業を進めて、文献索引を構築中である。ミャンマー語に関しては、研究所に所蔵されるスポーツとりわけミャンマーの伝統的スポーツ関係の史資料の電子化作業中である。なお同作業過程でタイで発行されたタイの5万分1地図が数十点所蔵されていることが判明し、タイ研究者から現今では国防政策上、入手が難しい貴重なものであると指摘を受け、カラー稠密で電子化・データベース化を行った。史料の性質上、取扱いに注意を要するが、貴重なアジア史資料として活用の仕方を考慮していくことになった。トルコ語に関しては予定通りに、戦間期（1920年代・1930年代）のトルコ語新聞・雑誌史資料のうち、本国では著名ではあるにも関わらず、国内の研究機関に所蔵のない日刊新聞『ULUS（＝国家）』に関して、電子化・データベース化作業を進めている。